

平田国学研究の課題と可能性

二〇〇一年から国立歴史民俗博物館によって調査がなされ、二〇〇四年に特別展示「平田篤胤と明治維新」として公開された平田篤胤（および鏡胤・延胤 関係の膨大な史料群は、篤胤やその門流（いばしゅう）の研究、さらには幕末維新期の社会史研究に新たな視界を開くものとして、一般の新聞などでも注目を浴びた。そういう気運を受けて、今こそ平田国学研究の課題と可能性を探ってみたいというのが、企画責任者である私の目論見であった。

私は平田国学を専門に研究する者ではなく、その知識も常識的な範囲を出るわけではない。周知のように、平田篤胤への社会的な評価は、戦前と戦後で反転した。かつて私は、敗戦を二十代半ばで迎えたある研究者の方から「戦前

田尻 祐一郎

の苦々しい思い出があるから、篤胤だけは読む気になれない」という言葉を聴いたことさえあったのである。しかし毀誉褒貶、そういう好悪のぶつかる激しい磁場から離れて、あらためて平田国学とは何だったのかを虚心に考えようという時代に入っていることは、私にも大分前から感じられていた。ただよく知られた通り、平田篤胤という人には、尋常ではない探求エネルギーのようなものがあつて、道教・仏教をはじめ、ありとあらゆる思想や事象を自分流に取り込んでしまう、ある種の暴力的とも言うべき霊的パワーがあり、容易に入り込めないという印象が拭い難い（余談ながら、大本教の出口王仁三郎の『靈界物語』を読んだ時にも同じような印象を持った）。とはいえ、そこで立ち竦んでいる

わけにはいかないので、今回は、近年の平田国学研究の潮流を担う三人の方に、それぞれの問題関心の在り処と研究の一端を平易に報告していただくこととした。まずは、私たちが、どういう地点に立っているのかを確認しておきたいということでもある。

最初の報告者は、新出の史料群の整理・調査・公開（翻刻）という作業に最初から参加されて、刮目すべき成果を挙げておられる吉田麻子さんである。吉田さんは、まず「平田国学研究史と平田篤胤関係資料の意義」ということで、これまでの研究史を、伊東多三郎・宮地正人、村岡典嗣・松本三之介・田原嗣郎・子安宣邦、折口信夫といった研究者の名を挙げながら、それぞれを社会史・思想史・民俗学という枠組みに拠るものとして整理した。中でも、今回の新出史料群を読み込んだ宮地正人氏が、篤胤が独自の知的ネットワークを持ち、かなり重要な機密情報までも早くから手に入れていたことを指摘して、対ロシア危機という契機を重視しながら平田国学の形成を理解しようとする着眼を高く評価した。続いて「書物の社会史という視点」として本題に入り、なぜ平田国学が当時の人々の心を捉えたのかという問題設定は、ナイーブに過ぎるようでありながらもやはり重要な論点であることを強調し、その問題に接近する上で、悪しき思想史風のアプローチを排して、書

物の出版・受容という側面に注目すべきことを主張した。悪しき思想史風のアプローチとは、篤胤の著作のあれこれを研究者が摘出して、かくかくの思想が篤胤にあつたから当時の人々が平田国学に参入したのだからというような議論の進め方を指す。それは、恣意的な思想史像の再構成になりがちであり、受容した側が、具体的にどのような思想情報に接して、何を選び取ったのかを明らかにするものではない。こう論じた吉田さんは、平田塾で刊行された著述の年代と時期ごとの発行（摺立）部数を表示して紹介した。すると、これまで思想史の研究者によってほぼ注目されなかつた著書が意外に多く普及していることが明らかになる。また、平田塾の門人帳なども駆使しながら、その普及には強い地域性があること、地域によって特色を異にする学習サークルが作られ、その活動の一環として書物の刊行があることも力説された。気吹舎は、政治・文化の全国ネットワークなのである。こうした活動を丁寧に分析する中からしか、なぜ平田国学が当時の人々の心を捉えたのかという主題への接近はありえないというのが吉田さんの持論である。結びとして吉田さんは、思想史研究者が（多くの場合）無批判に利用する『新修平田篤胤全集』などが、書誌調査において重大な問題を孕んだものであることに注意を促した。政治的な警戒もあって、流布本と版本では内

容が異なることがあり、あるいは序文の年次なども意図的に変えられることがあるという。これらを踏まえて、平田篤胤の思想を篤胤に即して研究することの意義を説いて報告を終えられた。

次いでこの報告者は、『平田国学と近世社会』（ベリかん社、二〇〇八年）を著され、宗教思想としての平田国学の研究で学界に刺激を与え、さらに近世の宗教的な社会編制との関連についても積極的な分析を試みておられる遠藤潤さんである。遠藤さんは、『霊の真柱』とは何だったのか」という点から報告に入った。遠藤さんも、宮地正人氏の篤胤理解を取り上げて、『霊の真柱』を、儒教的宇宙観では天文学をはじめとする西洋の科学知識に対抗できないという危機感から書かれたとする宮地氏の議論には、そもそも儒教的宇宙観の内容が曖昧であることをはじめとする問題が残っているとされた。そして、『霊の真柱』という時の「霊」を直ちに人間の靈魂として、この書の主題は、人間の死後の靈魂の行方を明らかにすることだと考える常識的な理解に強い疑問を表明され、天地泉めあふよみを天地泉たらしめる神々の「たま」の「はしら」（ヌボコ）という観点から読み直すべきことを説かれた。さらに遠藤さんは、西洋近代科学と出会うことでもたらされた世界認識の変化の問題として篤胤を捉えて、「実在」「可視」「不可視」の

領域、生死の領域の再分割として考察すべきことを主張された。須弥山的宇宙像が打撃を受けた幕末・維新期の仏教の護法論でも同じだが、進んだ西洋の科学的世界観が入ってきたことで、伝統的な思想が対抗的な言説を強弁したというように見えては問題の広がりを見失う。次に遠藤さんは、『黄泉国論争——「宣教」における靈魂の行方と黄泉国の場所』と題して、明治初年の黄泉国論争に話を進められた。まず、明治三年に始まる「宣教」が、キリスト教を強く意識しながら開始されたことに注意を促した上で、その思想的な骨格をまとめた『神魂大旨』や『神魂演義』が、気吹舎においては篤胤の説に依拠するものと理解されていたという。しかし「黄泉国」について、それを「月」の世界とする解釈と、場合によって「月」と「地胎」といづれかを指すという議論とが神祇官の中で対立するようになり、難しい問題が発生していく。同時にまた最高神（無上至尊の神）についても、いったんはアマテラスとする理解で落ち着いたが、アメノミナカヌシではないのかという議論が平田延胤らによって出されていく。ここから遠藤さんは、天地宇宙の生成に即して最高神を定位しようという発想が平田国学に根強いことを、改めて指摘された。つまり、アマテラスを最高神とする思想とは距離が出来る。まとめとして遠藤さんは、天地宇宙の生成、国家としての日本の優

越、靈魂の行方、この三者が不可分に結合し、いずれもが実体としての「実在」としてあつて、それが新たな「可視」「不可視」の領域に固有の仕方では配当されている、それが平田国学だと論じられた。

最後の報告者は、近世思想史の全体への幅広い目配りの中で、津軽という風土に根付いた平田国学の姿を精力的に明らかにされてきた小島康敬さんである。戦後の平田国学の研究史を、「草莽の国学」という視角からのもの、政治思想史の枠組みによるもの、民俗学的な関心からのものとして整理したうえで、小島さんは、平尾魯僊という人物をもつぱら論じられた。文化五年（二八〇八）弘前城下の商家の長男に生まれた魯僊は、しばらく家業に従事した後、家督を弟に譲って画家としての道を選んだという。日米和親条約で開港された箱館で、異国人の珍しい風俗をスケッチしたりもした魯僊は、また郷土の人々の暮らしや土地の景観を熱心に描き、その説話・奇談・怪談などを収集して記録した。その記録が、『合浦奇談』（安政二年）や『谷の響』（万延元年）である。そして元治元年（一八六四年）、地元の人を介して平田鏡胤に入門、五十八歳で主著『幽府新論』を書き上げて高い評価を得た。晩年には家塾を開いて教則本なども著し、明治十三年（二八八〇）、享年七十三で帰幽したという。津軽の地には、魯僊をはじめ十余人の

有力な平田国学の徒があつて、一つのサークルを作つて、気吹舎と連絡を密にしながら、通信販売のような形で書籍を購入し熱心に学習していたという。このように魯僊の人となり（画像も駆使されて楽しく）紹介された後、小島さんは『幽府新論』に見られる思想」として、魯僊の主著に立ち入った分析を試みられた。それは基本的に篤胤の幽冥観に立脚しながら、鬼神や幽冥界の実在を、和漢の膨大な典籍からの引用や津軽の民間伝承（小島さんは『遠野物語』を彷彿とさせるものとされた）の援用によつて証明しようとするものだといふ。魯僊は、人は皆、ムスビノカミの御霊を賜つて生まれるもので、死ねばその靈魂は幽冥界に留まるものとする。幽冥界は、遙か彼方にあるのではなく、この世からは見えないが、この世を包むようにして存在している。人の富貴天寿をはじめ、世界の万象はすべて天神地祇の司るもので、人間の理解の及ぶものではない。『幽府新論』には、深遠な神義論が展開されているわけではないが、風土として息付いている靈的存在への素朴な畏敬の心情と、そういう信仰に生きてきた人々への暖かな共感の気持ち溢れていると小島さんは読み解いている。青森県には今も、先の大戦で亡くなった若い独身の兵士のために、その遺影に花嫁人形を添わせて奉納する民俗が残っていることを紹介されて、小島さんは、研究者が頭で理解する次元より深

いものを、この平田国学の徒が掬い取っていたことを伝えて結びとされた。

三人の方の報告は、すぐれて個性的で、しかも力の籠ったもので、今更ながら平田国学を研究することの面白さを感じることが出来た。おそらく会場の多くの参加者の気持ちも同じだったに相違ない。報告を受けて澤井啓一さんから、含蓄に富むコメントをいただき、会場全体の討論に移ったわけであるが、討論も充実したもので、時間の制約で無理に終わりにしたというほどであった。その様子を再現する紙幅がないのは、残念である。良い発表を聴いた後が常にそうであるように、自分の研究方法について（堂々巡りの）自問自答、考えさせられることしきりであった。

*付記 この文章は、すべて私の責任で（大急ぎで）まとめ
たものです。あるいは報告の趣旨・内容を正確に伝えそこ
なっているかもしれない。もしそういうことがあれば、
お詫びいたします。

（東海大学教授）